

(No.149から続く) 第二期 18世紀から19世紀前半

1) 2) はNo.149

3) イギリス東インド会社は、ベンガルなどで【1: 】(地方徴税権)を獲得したことから、インド農民から地税を徴収し、綿花など農産物にかけてイギリスに送り、代金を国庫に納付してインド支配に要する公債の償還に充てた。はじめは既存の政治勢力を温存して、それを通じて徴税したが、地域の実情に応じた新方式に移行した。

重要 a) 1793年、ベンガル・ビハールに導入。これ以降北インドで実施した新しい税制は、ザミンダール(旧来の地主・領主)の伝統的権利を土地所有権と認める代わりに、彼らを地租納入の直接責任者とするもの。

…これを【2: 】という。地主支配を公認・強化するもので、ザミンダール以外の多くの地主や農民が既存の権利を失って没落し農村社会は激変した。

b) 19世紀初めから、マドラス管区等南インドやシンド地方で行った新しい税制は、実際の耕作農民である小経営の自作農(ライヤット)に土地保有権(厳密には所有権ではない)を与え、直接納税者として、植民地政庁が直接徴税するもの。

…これを【3: 】という。税が払えない農民は土地を奪われ小作人に転落した。

税額も従来より重く、支払いは現金。19世紀前半は農産物価格は低迷し、税の支払いのためにより多くの作物を売らなければならなかった。

4) 1760年代に始まった産業革命は進展し、1785年のカートライトの力織機の発明で、インドの手織り綿布に匹敵する品質の綿織物の大量生産が可能になった。本国の産業資本家の要求でイギリス東インド会社は、インドの手織りの綿織物業に対し規制や課税、暴力的弾圧等を加えるなど、あらゆる手段でこれを弱体化させ、イギリスの機械生産による綿布の輸入を強制した。ベンガルの手織り綿布生産は壊滅的打撃を受け、他の在来手工業も打撃をうけた。1810年代末には、インドのイギリス綿布輸入額は、輸出額を上回った。1820年代には、かつて世界一の綿布生産国だったインドは、原料の綿花をイギリスに輸出し綿布を輸入する国に転落した。インドは綿花に限らず、アヘン、藍、麻、コーヒー、茶などを強制的な手段やプランテーションで生産し、イギリスに供給し、イギリスから工業製品を輸入する地位に転落した。

1853年にはボンベイ・ターナ間に鉄道が開通した。

右のよく知られたグラフで「インドよりヨーロッパへ」とは《インドからイギリスへ》、「イギリスより東洋へ」とは《イギリスからインドへ》とほぼ同じである。

創刊当初の『エコノミスト』には、インドと綿花をめぐる記事が多い。その中で、1847年には「なぜインドは我々に綿花を供給しないのか?」という社説を実に5回に亘り、掲載している。国内の紡績業を存立させるためにもインドからの綿花の供給を確保しなければならない、というのがこの記事の論調だ。上のグラフを見た上でこの記事を読むと、イギリス資本の執拗で際限のない蓄積衝動を感じないわけにはいかない。『エコノミスト』は1843年創刊のイギリスの週刊新聞。毎日新聞社の週刊誌『エコノミスト』とは無関係

イギリスのインド貿易



第三期 (19世紀後半 植民地化完成期…国家主権を完全に喪失)

インド大反乱とインド帝国の成立

1) イギリスによる植民地化がすすむなかで、農民は土地を失い、旧支配層は領土や地位を奪われ、ランカシャー産の安価な機械織り綿布の流入、伝統的な綿織物産業の破壊で失業者は増大し、人々の反英感情は日に日に高まっていった。イギリスはインド植民地化の最終段階に入った。

2) ついに **インド大反乱** 1857~59年 起きる

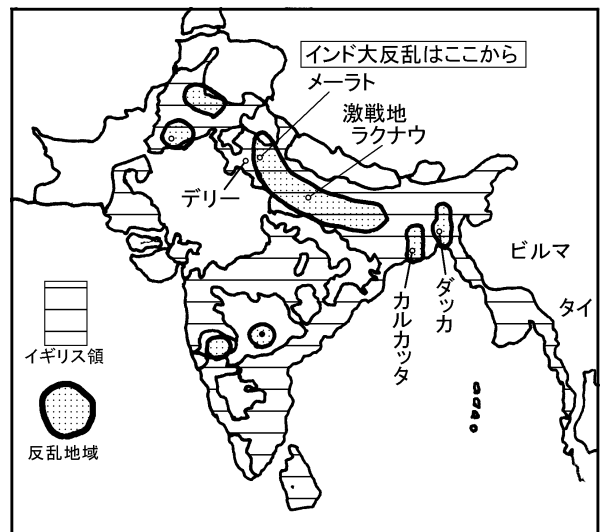
① 1857年5月10日、【4: 】で起きた【5: 】の反乱が発端であるが、階級、宗教を超えた全民族的反英運動であり、インドでは「1857年インド独立戦争」と呼ぶのが普通。シパーヒーとはペルシア語で「兵士」。東インド会社が雇用したインド人傭兵。上級カーストのヒンドゥー教徒やイスラーム教徒から成り、軍内部では両教徒は日頃犬猿の仲だった。この時はヒンドゥー・イスラームの宗教的対立を越えて協力した。

→後掲3)

② 1857年5月11日 反乱軍、【6: 】に到着。デリーのシパーヒーや市民も反乱に加わり、反乱軍はデリーを占領。逡巡するムガル皇帝【7: 】(位1837~58)を説得、擁立し、ムガル皇帝の名でインド各地に反乱を呼びかける檄文を送った。 Meerat からガンジス・ジャムナー川流域の民衆反乱へ、北インド全域に及ぶ大反乱となり、イギリスのインド支配は崩壊するかにみえた。

③ 反乱軍には統一された組織がなく、確たる戦略もなかったため、イギリスが態勢を立て直し、多くの藩王を味方につけ、アフガン人・グルカ兵(ネパール山岳民族の傭兵)まで利用して反撃に転じると反乱は個別に撃破され、残酷に鎮圧されていった。見せしめのため、反乱軍兵士を大砲の砲身出口付近に固定、木製弾を発射して虐殺する等も行ったと伝えられる。

1857年9月 デリー陥落。ムガル皇帝は捕虜となり、その息子たちは処刑された。翌1858年3月にはもう一つの反乱の拠点であったラクナウも陥落。

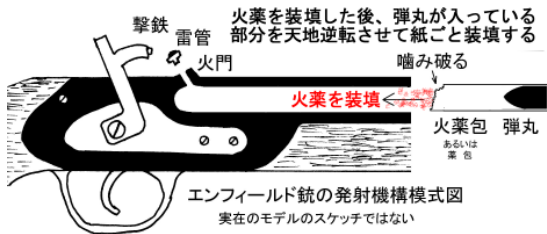


同1858年8月、ムガル皇帝は廃位されビルマ（ミャンマー）に流刑にされ、300年以上続いた【8: (1526～1858) は名実ともに滅亡した

④まだ反乱を鎮圧しきれていない時期だが、1858年8月、【9: 】はシパーヒーの反乱を招いた責任から解散させられ、同1858年11月、インドはイギリス政府の直接統治下に置かれることになった。デリー、ラクナウなどの拠点を失った後も、インド人は各地でゲリラ戦を展開したが、1859年4月には3年に及んだインド大反乱は完全に鎮圧された。

⑤1877年、【10: 】(-1947)を成立させ、ヴィクトリア女王がインド皇帝を兼任することとなった。

3) シパーヒーの反乱はなぜ起きたか？



①東インド会社軍が採用した新しいエンフィールド銃(1853年制式)の弾薬包に、ヒンドゥー教徒の神聖視する牛の脂とイスラーム教徒が不浄なもののみならず豚の脂がぬってあり、これによって彼らの宗教を放棄させようとしている、という噂(うわさ)が急速にひろまったことが直接の発端。弾を装填(そうてん)するには弾薬包をかみ切らねばならず、それは両教徒にとってタブーをおかすことを意味していたからイギリスは両教徒共通の神敵となった。東インド会社軍は噂を否定するとともに、「歯で噛み破れ」という指示を「指でちぎって破れ」に改めたが効果はなかった。

《やや詳しく解説すると》エンフィールド銃はまだ弾丸と弾薬を別々に装填した。弾薬包とは1回分の弾薬とグリスを塗った弾丸1発を油脂を引いた防湿紙で密封した細長い筒状。その底に弾丸が尖った方を上に向けて封入されている。まず、防湿紙を噛み切つて火薬を銃口から銃身に流し込み、次に薬包紙を反転させて薬包紙に包まれたままの弾丸を尖った方を上にして銃口から銃身に装填、棒で押し込んだ。これでも当時としては先込め式銃の最も進歩した形である。次の段階で火薬包と弾丸が一体化、さらに元込め式銃が開発された。もし油脂が牛・豚のものなら、それは両教徒にとってタブーをおかすことを意味していた。

②なぜ1857年なのか？前年の1856年に多くのムスリム兵士たちの出身地だったアワド地方がイギリスによって併合されたから。イギリスはシパーヒーの海外派兵を行おうとしていた。また、イギリスの機械織りの綿織物がインドの地域産業を破壊し、新しい地稅制度や裁判制度が人々の伝統的慣習を崩壊させ、社会不安が増大していた。

③なぜ5月10日なのか？・・・4月末にメーラトのシパーヒー連隊で90人中85人が弾薬包に手を触れることを拒否し、軍法会議で強制労働10年の判決が下り、5月9日に85人が投獄されたから。そしてこの時期は、インドで最も蒸し暑い時期である。この時期のインドの蒸し暑さたるやわが国の比ではない。

④なぜ月が出ない夜起きたか？・・・大砲の照準ができないから。少数ながら大砲が扱えるイギリス人の操作する大型兵器の威力を恐れずにすむから。

4) 「大反乱の英雄」を一人覚えておこう。【11: 】Lakshmi Bai ?-1858 はインド中部の小国、ジャーシー国の王妃。王の死によりイギリスに国を併合されたため、大反乱に参加、有能な指導者として知られ、「ジャーシーの女王」と呼ばれたが、翌1858年、戦闘中に死亡した。

インド帝国の成立

1) インド大反乱に強い衝撃をうけたイギリスは、1858年に東インド会社を解散して、直接統治に乗り出した。1877年、インド帝国が成立。イギリス国王の【12: 】がインド皇帝を兼ねた。このときの首相はディズレーリ。

インド帝国はイギリス直轄領と大小500を越える藩王国から成り、イギリスは従来の強圧的政策を改め、藩王国取りつぶし政策も止め、これら保守的な藩王国を保護しつつ 09M、インド人同士の対立を作り出す巧妙な分割統治によってインドの植民地経営を行った。

2) インド帝国にはイギリスからの投資が集中し、電信、鉄道、運河などの社会基盤(インフラ)が整備された。プランテーション農業が展開された。(例)スリランカの茶

3) インドは一次産品を輸出し、イギリスから工業製品を輸入する国に転落したが、これは対ヨーロッパの局面であって、19世紀以降、東南アジア・東アジア向けには、インドは綿布や綿糸の輸出を拡大、19世紀後半には近代的な綿工業も勃興した。

4) イギリスはインドの極端な因習※1の改革は進めたが、カースト制(ヴァルナ=ジャーティー制)は廃止せず、温存、再編※2して支配に利用したばかりか、地域や宗教上の対立、カースト間の対立を助長した。これは「分割して統治せよ」の一環である。

※1 因習の最悪のものは、幼児婚と寡婦の殉死(サティー)であろう。インド側にもラーム=モーハン=ローイなど因習の除去に取り組む人材も現れた。 04J他

※2 1871年、クリミナル・トライブ法を制定し、反英的な抵抗集団を罪人(クリミナル)カーストとして差別させた。

5) イギリスは、インドの公用語をペルシア語から英語に変え、自らの支配に利用するため、インド人官僚を養成する大学(当然英語で教育)を設立した。こうして養成された欧米型の知識・教養を持ったインド人の中から、植民地統治制度の中で「出世」をはかる者もあらわれた。同時に次代の民族運動の担い手も、まずはこうしたエリートの中からあらわれた。

2004上智(抜粋)

正解 問1d 問2a

問1 1857～59年の出来事ではないものを選びなさい。

- a ムガル帝国が滅亡した。
- b イギリス東インド会社が解散した。
- c インド大反乱が起こった。
- d ヴィクトリア女王がインド皇帝になった。

問2 誤った組み合わせはどれか。

- a 「富の流出」批判 — タゴール
- b サティー(寡婦殉死)批判 — ラーム=モーハン=ローイ
- c カースト制度反対 — アンベードカル
- d 人種差別反対 — パネルジー